

「分かち合う喜び」

ヨハネによる福音書 6:1-14

今日の聖書の箇所は、イエスさまが5つのパンと2匹の魚で、5千人もの群衆のお腹を満たしたという奇跡物語です。福音書の中には、イエスさまのなされた「奇跡物語」がたくさん記されていますが、どの奇跡も、イエスさまが「ただの人」ではなく、「人となられた神の御子」であることを証ししている「しるし」なのです。

この「五千人の供食」の記事は、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの各福音書に共通のものであり、すべての福音書に記されている唯一の奇跡物語です。さらにマタイ福音書とマルコ福音書には、7つのパンと少しの魚で4千人の群衆のお腹を満たしたという、これと類似した記事も記されています。つまり、福音書の中に合計6回も、イエスさまが群衆にパンを与えて満腹させたという奇跡が記されているのです。このことは、パンの問題が、私たち人間にとってどんなに大切な問題であるか、ということ物語っていると思います。

イエスさまが伝道活動を始めるにあたって、荒野で最初に出会った誘惑は、「神の子なら、石をパンに変えてみよ」というサタンの試みでした。イエスさまは、その問いかけに「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」（マタイ 4:4）というみ言葉をもって、その試みを退けました。たしかに、人はパンだけで生きるものではありません。しかし、パンがなければ生きられないことも事実です。現に当時も、今も毎日のパンがないために飢え渴き、それによって栄養失調になって、命を落とす人たちが少なからずいるのです。

私たちは、自然の豊かな日本にいて、あまり飢えの問題を深刻に感じていないかもしれませんが、中東やアフガニスタン、パキスタン、アフリカの砂漠地帯では、干ばつや紛争によって、想像できないような食糧難に苦しんでいる人たちが多くいるのです。絶え間ない紛争や戦争の根底にある問題は、食料問題にあると言われます。

そういう中で、イエスさまが、わずかのパンと魚で、4千人、5千人もの群衆の飢えを満たしたという出来事は、私たちに大きな慰めと希望を与えるものではないかと思えます。イエスさまはたしかに、「人はパンだけで生きるものではない」と言われました。しかしそれは、決して「パンなどどうでもいい」とか、「パンが無くても生きられる」などというような意味ではありません。

イエスさまがガリラヤ湖の向こう岸に渡られた時のことです。他の福音書では「人里離れた所」となっています。病人を含む大勢の人々がイエスさまの後を追って、集まって来たのです。イエスさまは、そのおびただしい群衆を見て山に登られたのです。

「山上の説教」の時のように、山の上から群衆に「神の国の福音」を宣べ伝えるためです。マルコ福音書によると「イエスは大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教えはじめられた」(6:34)と記されています。「飼い主のいない羊」とは、迷える羊のことで、オオカミの餌食になるしかないような、心もとない不安な状態にあることを意味します。イエスさまはそのような群衆のありさまを、心から「憐れまれた」のです。そこで用いられている「憐れむ」という言葉は、ギリシャ語で「スプランクニゾマイ」という言葉で、「はらわた」を意味する言葉から来ているのです。これは、単なる「同情」ではなく、「はらわた」が揺さぶられるほどに、相手の痛み苦しみを共に担い、共に苦しむという、意味です。そのようなイエスさまの憐れみ(愛)が、そこでのみ言葉の解き明かしや、パンの奇跡の動機になっているのです。

このヨハネ福音書によると、イエスさまは、大勢の群衆を見て、弟子のフィリポに「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」(5節)と言われました。イエスさまが「こう言ったのは、フィリポを試みるためであって、ご自分では何をしようとしているか知っておられた」(6節)というのです。つまりイエスさまは、初めから、自ら「この人たちにパンを与えよう」と決意しておられたということです。このパンの奇跡は、イエスさまご自身の強い意志によってなされた業であったのです。

イエスさまの問いに、フィリポはとっさに答えました。「めいめいが少しずつ食べるためにも、2百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」(7節)と。1デナリオンというのは、1日分の労働者の賃金です。1日5千円としても、200日分(7ヶ月分)の賃金ということになり、100万円ということになります。群衆は5千人とありますが、これは当時の習慣として、男だけの数ですから、女性や子供の数を入れると、少なくとも1万人ぐらいになると思います。100万円を1万人で割ると、1人あたり100円になります。100円ではアンパン1つ買えませんね。フィリポは、こういう計算を頭の中でパツとして、すぐに「とても無理です」という結論を出したのです。

そのやりとりを側で聞いていたもう一人の弟子であるペトロの兄弟アンデレは、いち早く群衆の中から一人の少年を見つけ、「ここに大麦のパン5つと魚2匹とを持っている少年がいます」と報告したのです。このアンデレは、頭で考えて計算するよりも、群衆の中に入って行って、食べ物を持っていそうな人を探し出したのです。

ここにフィリポとの違いがあります。フィリポは頭で考えて、素早く計算をし、いくらお金が必要か、手持ちのお金で可能かどうか、判断しました。それに対してアンデレは、何も考えずに群衆の中に飛び込んで行って、問題解決の手がかりを探し出したのです。フィリポが「思考型」の人間であるとする、アンデレは「行動型」の人間と言えるかもしれません。この二つのタイプは、何か大きな事業をするような時、両方とも

必要なのです。私は、これまで三度、会堂や牧師館などの建築に関わりましたが、慎重に資金計画を立てて、その立場から意見を述べてくれる人と、資金面よりも、色々と業者などに当たって具体案を出してくれる人などがいて、それぞれの働きが助けになりました。具体策と資金面からの意見とが、時には激しくぶつかり合うこともありました。その両面がなければ、ことはうまく進まないのです。イエスさまの弟子たちの中にも、このような賜物の違いがあることを興味深く思います。これが教会なのです。色々な立場があって色々な意見が交わされて、それでいいのです。

しかし、ここで問題なのは、フィリポとアンデレの両者共に、イエスさまの強い意思に対して、消極的な結論しか出せなかったということです。アンデレは、「ここに大麦のパン5つと、魚2匹とを持っている少年がいます」と言った後、「けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう」(9節)と否定的な言い方をしています。

結局、フィリポもアンデレも、結論は一緒で、「無理です」「不可能です」「何の役にも立ちません」という答えなのです。たしかに、常識的に考えて、男だけで5千人、全部合わせて1万人にもなる人々に、食べ物を与えるということは、弟子たちの力に余る、無理なことで、極めて「現実的」な答えだったのです。

しかし、イエスさまは、人々を青草の上に座らせ、その少年の差し出した「パンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられ、また魚も同じようにして、分け与えられた」(11節)のです。一人一人の手に渡ったものは、吹けば飛ぶような小さな断片であったかもしれません。しかし、みんながそれを感謝して受け取って共に食すると、みんなが「満腹した」というのです。これは常識を超えた「奇跡」です。この奇跡については、だれも合理的に説明はできないことです。

ある註解者は言います。<小さい子どもが自分のお弁当を差し出したことで、集まっていたみんなも、それぞれに持参してきた食べ物を出して、分け合って食べたのではないか?>と。しかし、これではイエスさまが、愛をもって為そうとしておられた意図を無視することになります。イエスさまは、神の御子として、神の愛の御業を示すと共に、神の国における祝宴の喜びをお示しになったのです。愛は奇跡を生むのです。

この「愛が奇跡を生む」ということで思い出すのは、今話題になっているアフガニスタンで、40年近くその地で医療活動を続け、その地の人々を愛し、命まで捧げた中村哲さんのことです。彼は福岡のバプテスト教会の信徒ですが、医師になってから「キリスト教海外医療協力会」から派遣されてパキスタンからアフガニスタンに移って主にハンセン病や結核などの治療に当たっていました。毎日切れ目なく訪れる数多くの病人の治療に当たりながら、中村さんは、病気の原因が、清潔な水がないことと、食料不足のための栄養不良にあることに気付き、井戸を掘りはじめ、現地の人たちと1,600

もの井戸を掘ったのです。ある程度飲み水は確保できたものの、雨がほとんど降らない砂漠のような荒地で、全く農作物が実らないことに心を痛み、はるか遠くを流れるクナル川から、灌漑水路をひくことを思いつくのです。彼は日本の江戸時代の治水工事のやり方を学び、手作業で水路を造る作業に取り掛かったのです。その地方の人たちを説得して協力してもらい、その後ブルトーザを購入し、自らそれを運転して、6年かけて25kmの用水路を完成させ、畑を耕し、木を植えて、砂漠のような土地を緑の大地に変えたのです。忙しい医療活動の合間によくそのような大事業を成し遂げることが出来たものだと思います。それこそ「砂漠に水がわく」ような変化によって、作物が実るようになり、みんなの健康と生活が維持されるようになったのです。するとその地域には争いが無くなり、戦争に行く必要もなくなり、多くの難民が戻って来て、農作業に携わるようになったのです。その背後には、日本のベシャワール会という民間団体の支援もあったわけですが、土木に関して全く素人の医師が、全く何もないところから、その地域の何百万もの人々を病と飢え渴きから救ったのです。彼はその土地の人たちみんなから「カカ・ムラド」(ナカムラのおじさん)と呼ばれて敬愛されていましたが、一昨年12月、活動中に武装集団に銃撃され73歳生涯を全うされたのです。しかしその事業は、今も地元の人たちによって引き継がれ、さらに緑の地が広がられているということです。

この中村医師の働きを通して思うことは、厳しい現実を前にして、その現実にもみ込まれて「何もできない」とあきらめず、どんなに厳しい現実の中にも生きて働かれる神を信じ、望みをもって目前で苦しんでいる人々を愛し、出来るだけのことをやってみるということです。そこから希望の光が見えてくるのです。

フィリポは、「2百デナリオンのパンがあっても足りないでしょう」と諦め、アンデレは「5つのパンと2匹の魚では、何の役にも立たない」と投げ出してしまいました。しかし、イエスさまは違いました。少年の手からパンと魚を受け取ると、感謝の祈りを捧げて、みんなに分け与えられたのです。弟子たちが「これしかない」「これでは何の役にも立たない」と無視したものをイエスさまは「これだけある」と言って感謝して祈り、みんなのために分け与えたのです。そこに神さまの力が働いたのです。信仰は力です。「これしかない」「これでは何もできない」という、現実を越えて、明るい未来を切り開くのです。それが、信仰のもたらす力なのです。

今日は敬老の祝福を祈る主の日です。年老いて、たとえ何もできないと思うような時にも、私たちは神さまに祈り、人を愛することが出来るのです。出来ないことを嘆くのではなく、今与えられている恵みに感謝し、喜びをもって主に仕え、少しでもこの世のために、世界の平和のために祈り努めたいと願います。

アーメン